

東大 2018 年度数学解答例

文殊の知恵
高橋那弥

目次

第 1 問	1
第 1 問問題文	1
第 1 問解答例	2
第 2 問	4
第 2 問問題文	4
第 2 問解答例	5
第 3 問	7
第 3 問問題文	7
第 3 問解答例	8

第 1 問

第 1 問 問題文

次の連立一次方程式を解く問題を考える.

$$\mathbf{A}\mathbf{x} = \mathbf{b}$$

ここで, $\mathbf{A} \in \mathcal{R}^{m \times n}$, $\mathbf{b} \in \mathcal{R}^m$ は与えられた定数の行列とベクトルであり, $\mathbf{x} \in \mathcal{R}^n$ は未知ベクトルである. 以下の問いに答えよ.

- (1) $\overline{\mathbf{A}} = (\mathbf{A} | \mathbf{b})$ のように, 行列 \mathbf{A} の最後の列の後ろに 1 列追加した $m \times (n+1)$ 行列を作る. 例えば, $\mathbf{A} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 \\ 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 1 \end{pmatrix}$, $\mathbf{b} = \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \\ 2 \end{pmatrix}$ の場合には, $\overline{\mathbf{A}} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & 2 \\ 1 & 1 & 0 & 4 \\ 0 & 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$ となる. この例の $\overline{\mathbf{A}}$ の第 i 列ベクトルを \mathbf{a}_i ($i = 1, 2, 3, 4$) とする.

(i) $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ のうち線形独立なベクトルの最大個数を求めよ.

(ii) \mathbf{a}_4 が $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ の線形和で表されることを, $\mathbf{a}_4 = x_1\mathbf{a}_1 + x_2\mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3$ となるスカラー x_1, x_2 を求めることで示せ.

(iii) $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3, \mathbf{a}_4$ のうち線形独立なベクトルの最大個数を求めよ.

- (2) 任意の m, n , \mathbf{A}, \mathbf{b} に対して, $\text{rank}\overline{\mathbf{A}} = \text{rank}\mathbf{A}$ のとき連立一次方程式の解が存在することを示せ.

- (3) $\text{rank}\overline{\mathbf{A}} > \text{rank}\mathbf{A}$ ならば解は存在しない. $m > n$, $\text{rank}\mathbf{A} = n$ で, $\text{rank}\overline{\mathbf{A}} > \text{rank}\mathbf{A}$ のとき, 連立一次方程式の右辺と左辺の差のノルムの 2 乗 $\|\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}\|^2$ を最小にする \mathbf{x} を求めよ.

- (4) $m < n$, $\text{rank}\mathbf{A} = m$ のとき, どのような \mathbf{b} に対しても連立一次方程式を満たす解が複数存在する. 解のうちで $\|\mathbf{x}\|^2$ を最小にする \mathbf{x} を, 連立一次方程式の制約条件として, ラグランジュ乗数法を用いて求めよ.

- (5) 任意の m, n , \mathbf{A} に対して, 以下の 4 つの式を満たす $\mathbf{P} \in \mathcal{R}^{n \times m}$ が唯一に決まることを示せ.

$$\begin{aligned} \mathbf{A}\mathbf{P}\mathbf{A} &= \mathbf{A} \\ \mathbf{P}\mathbf{A}\mathbf{P} &= \mathbf{P} \\ (\mathbf{A}\mathbf{P})^T &= \mathbf{A}\mathbf{P} \\ (\mathbf{P}\mathbf{A})^T &= \mathbf{P}\mathbf{A} \end{aligned}$$

- (6) (3) で求めた \mathbf{x} と (4) で求めた \mathbf{x} が, いずれも $\mathbf{x} = \mathbf{P}\mathbf{b}$ の形で表せることを示せ.

第 1 問 解答例

- (1) (i) $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ が線形従属の関係にある場合, 実数 c ($\neq 0, \in \mathbb{R}$) を用いて

$$\mathbf{a}_1 = c \mathbf{a}_2$$

と表すことができる. しかし, $\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$, $\mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$ であることから, これを満たす実数 c は存在しないので, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ は線形独立なベクトルである. 次に, \mathbf{a}_3 が $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ の線形従属の関係にある場合, 実数 c_1, c_2 ($\neq 0, \in \mathbb{R}$) を用いて

$$\mathbf{a}_3 = c_1 \mathbf{a}_1 + c_2 \mathbf{a}_2$$

と表すことが出来る. $\mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ であるので, $c_1 = -1, c_2 = 1$ とすればこの式は満たされる. ゆえに \mathbf{a}_3 は線形従属の関係にあるので, 線形独立なベクトルの最大個数は 2 個である.

- (ii) \mathbf{a}_4 について $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ の線形和で表されることを x_1, x_2 を求めることで示す.

$$\begin{aligned} \mathbf{a}_4 &= x_1 \mathbf{a}_1 + x_2 \mathbf{a}_2 + \mathbf{a}_3 \\ \iff \begin{pmatrix} 2 \\ 4 \\ 2 \end{pmatrix} &= x_1 \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_2 \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} + \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \\ \iff \begin{cases} 2 &= x_1 - 1 \\ 4 &= x_1 + x_2 \\ 2 &= x_2 + 1 \end{cases} \\ \iff \begin{cases} x_1 &= 3 \\ x_2 &= 1 \end{cases} \end{aligned}$$

したがって, $x_1 = 3, x_2 = 1$ というスカラーの組が求まったので, \mathbf{a}_4 は $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ の線形和で表される.

- (iii) \mathbf{a}_4 は $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ の線形和で表されることから \mathbf{a}_4 は $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ と線形従属な関係であるので, 線形独立なベクトルの最大個数は 2 個である.

- (2) 行列 \mathbf{A} の第 i 列ベクトルを \mathbf{a}_i ($i = 1, 2, \dots, n$) とする. $\text{rank } \overline{\mathbf{A}} = \text{rank } \mathbf{A}$ のとき, 実数 c_i ($\neq 0, \in \mathbb{R}$) を用いて

$$\mathbf{b} = \sum_{i=1}^n c_i \mathbf{a}_i$$

と表すことができる. この c_i を 1 から順に n まで縦に並べた $\mathbf{c} = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \\ \vdots \\ c_n \end{pmatrix}$ をつくと

$$\mathbf{A}\mathbf{c} = \mathbf{b}$$

となるので, \mathbf{c} は連立方程式の解 \mathbf{x} となる. ゆえに題意は示された.

- (3) 以下のように変形することができる.

$$\begin{aligned} \|\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}\|^2 &= (\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x})^T (\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}) \\ &= (\mathbf{b}^T - \mathbf{x}^T \mathbf{A}^T) (\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}) \\ &= \mathbf{x}^T \mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} - 2\mathbf{x}^T \mathbf{A}^T \mathbf{b} + \mathbf{b}^T \mathbf{b} \end{aligned}$$

これを \mathbf{x} で微分すると

$$\frac{\partial \|\mathbf{b} - \mathbf{A}\mathbf{x}\|^2}{\partial \mathbf{x}} = 2\mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} - 2\mathbf{A}^T \mathbf{b}$$

となる. ゆえに最小となる必要条件は

$$\mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} = \mathbf{A}^T \mathbf{b}$$

である. $\text{rank} \mathbf{A} = n$ かつ $\text{rank} \overline{\mathbf{A}} > \text{rank} \mathbf{A}$ のとき, $\text{rank}(\mathbf{A}^T \mathbf{A}) = n$ となる. ゆえに \mathbf{A} は正則であるので, 逆行列が存在して

$$\begin{aligned} (\mathbf{A}^T \mathbf{A})^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{A} \mathbf{x} &= (\mathbf{A}^T \mathbf{A})^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{b} \\ \iff \mathbf{x} &= (\mathbf{A}^T \mathbf{A})^{-1} \mathbf{A}^T \mathbf{b} \end{aligned}$$

となる.

第 2 問

第 2 問 問題文

関数 f_1 を $[0, 1]$ 上で定義される正値の定数関数とし, $f_1(x) = c$ とおく. また, 正の実数 p, q を $1/p + 1/q = 1$ を満たすものとする. これらに対し, $[0, 1]$ 上で定義される関数の列 $\{f_n\}$ を

$$f_{n+1}(x) = p \int_0^x (f_n(t))^{1/q} dt$$

で定める. 以下の問いに答えよ.

- (1) $a_1 = 0, c_1 = c$ かつ

$$\begin{aligned} a_{n+1} &= q^{-1}a_n + 1 \quad (n = 1, 2, \dots), \\ c_{n+1} &= \frac{p(c_n)^{1/q}}{a_{n+1}} \quad (n = 1, 2, \dots) \end{aligned}$$

で定まる実数列 $\{a_n\}$ と $\{c_n\}$ を用いて $f_n(x) = c_n x^{a_n}$ と表されることを示せ.

- (2) $n \geq 2$ に対し $[0, 1]$ 上で定義される関数 g_n を $g_n(x) = x^{a_n} - x^p$ とおく. $n \geq 2$ に対し $a_n \geq 1$ となることに注意して, g_n がある点 $x = x_n$ で最大値をとることを示し, この x_n を求めよ.

- (3) 任意の $x \in [0, 1]$ に対して $\lim_{n \rightarrow \infty} g_n(x) = 0$ となることを示せ.

- (4) $d_n = (c_n)^{q^n}$ とおく. d_{n+1}/d_n が $n \rightarrow \infty$ のとき有限な正の値に収束することを示せ.
なお, $\lim_{t \rightarrow \infty} (1 - 1/t)^t = 1/e$ となることは用いて良い.

- (5) $\lim_{n \rightarrow \infty} c_n$ の値を求めよ.

- (6) 任意の $x \in [0, 1]$ に対して $\lim_{n \rightarrow \infty} f_n(x) = x^p$ となることを示せ.

第 2 問 解答例

(1) 数学的帰納法によって示す.

(i) $n = 1$ のとき,

$$f_1(x) = c = c \cdot x^0 = c_1 x^{a_0}$$

となるので, 成立する.

(ii) $n = k$ のとき $f_n(x) = c_n x^{a_n}$ であると仮定すると, $n = k + 1$ のときは

$$\begin{aligned} f_{k+1}(x) &= p \int_0^x ((f_k(t))^{1/q} dt \\ &= p \int_0^x (c_k x^{a_k})^{1/q} dt \\ &= p \left[c_k^{1/q} \cdot \frac{q}{a_k + q} x^{\frac{a_k + q}{q}} \right]_0^x \\ &= p c_k^{1/q} \cdot \frac{1}{q^{-1} a_k + 1} x^{q^{-1} a_k + 1} \\ &= \frac{p c_k^{1/q}}{a_{k+1}} x^{a_{k+1}} \\ &= c_{k+1} x^{a_{k+1}} \end{aligned}$$

となり, 成立する.

(i),(ii) より, 数学的帰納法より, 題意は示された.

(2) $n \geq 2$ のとき,

$$g'_n(x) = a_n x^{a_n - 1} - p x^{p-1}$$

ここで, a_n の一般項を求める. 特性方程式 $\alpha = q^{-1}\alpha + 1$ を解くことによって, $\alpha = p$ となる. ゆえに

$$\begin{aligned} a_n - p &= q^{-1} (a_n - p) \\ a_n &= p (1 - q^{1-n}) < p \end{aligned}$$

ゆえに, $g'_n(x) = 0$ となるときは

$$\begin{aligned} g'_n(x) &= 0 \\ \iff a_n x^{a_n - 1} - p x^{p-1} &= 0 \\ \iff x^{a_n - 1} (a_n - p x^{p - a_n}) &= 0 \\ \iff x = 0, \left(\frac{a_n}{p} \right)^{\frac{1}{p - a_n}} \end{aligned}$$

$g'_n(1) = a_n - p < 0$ より増減表は以下のように書くことができる.

x	0	...	$\left(\frac{a_n}{p} \right)^{\frac{1}{p - a_n}}$...	1
$g'_n(x)$	0	+	0	-	$a_n - p$
$g_n(x)$	0	\nearrow		\searrow	0

よって, $x_n = \left(\frac{a_n}{p} \right)^{\frac{1}{p - a_n}}$ のとき最大値をとることが示された.

(3) まず,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \{p(1 - q^{1-n})\} = p$$

より,

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} g'_n(x) &= \lim_{n \rightarrow \infty} a_n x^{a_n-1} - p x^{p-1} \\ &= p x^{p-1} - p x^{p-1} \\ &= 0\end{aligned}$$

これより関数 $g'_n(x)$ は区間 $[0, 1]$ において増減がなく, $n \rightarrow \infty$ において $g_n(0) = g_n(1) = 0$ であるから, 任意の $x \in [0, 1]$ に対しても $n \rightarrow \infty$ において $g_n(x) = 0$ となる. よって, 題意は示された.

(4) q の大きさについて

$$\begin{aligned}\frac{1}{p} + \frac{1}{q} = 1 &\implies \frac{1}{q} < 1 \\ &\iff q > 1\end{aligned}$$

となる. d_{n+1}/d_n について整理すると

$$\begin{aligned}\frac{d_{n+1}}{d_n} &= \frac{\left(\frac{p(c_n)^{1/q}}{a_{n+1}}\right)^{q^{n+1}}}{(c_n)^{q^n}} \\ &= \frac{p^{q^{n+1}}(c_n)^{q^n}}{(a_{n+1})^{q^{n+1}}(c_n)^{q^n}} \\ &= \frac{p^{q^{n+1}}}{(a_{n+1})^{q^{n+1}}} \\ &= \left(\frac{p}{p(1-q^{-n})}\right)^{q^{n+1}} \\ &= \left(\frac{1}{1-q^{-n}}\right)^{q^{n+1}} \\ &= \left(\frac{1}{1-\frac{1}{q^n}}\right)^{q^n} \cdot \left(\frac{1}{1-\frac{1}{q^n}}\right)\end{aligned}$$

$q > 1$ より, $n \rightarrow \infty$ のとき $q^n \rightarrow \infty$ であることを用いて

$$\begin{aligned}\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{d_{n+1}}{d_n} &= \lim_{n \rightarrow \infty} \left(\frac{1}{1-\frac{1}{q^n}}\right)^{q^n} \cdot \left(\frac{1}{1-\frac{1}{q^n}}\right) \\ &= \frac{1}{e}\end{aligned}$$

第3問

第3問 問題文

赤いカードが2枚と白いカードが1枚入った袋および複素数 z_n, w_n ($n = 0, 1, 2, \dots$) について考える. まず, 袋から1枚のカードを取り出し袋に戻す. このとき取り出されたカードの色に応じて z_{k+1} ($k = 0, 1, 2, \dots$) を以下のルールで生成する.

$$z_{k+1} = \begin{cases} iz_k & \text{赤いカードが取り出された場合} \\ -iz_k & \text{白いカードが取り出された場合} \end{cases}$$

次に, 袋からもう一度1枚のカードを取り出し袋に戻す. このとき取り出したカードの色に応じて w_{k+1} を以下のルールで生成する.

$$w_{k+1} = \begin{cases} -iw_k & \text{赤いカードが取り出された場合} \\ iw_k & \text{白いカードが取り出された場合} \end{cases}$$

ここで, 各カードは独立に等確率で取り出されるものとする. また初期状態を $z_0 = 1, w_0 = 1$ とする. すなわち, z_n, w_n は, $z_0 = 1, w_0 = 1$ の状態から始め, 上記の一連の二つの操作を n 回繰り返した後の値である. なお, ここでは i は虚数単位とする.

以下の問いに答えよ.

- (1) n が奇数のとき $\operatorname{Re}(z_n) = 0$, 偶数のとき $\operatorname{Im}(z_n) = 0$ であることを示せ. ただし, $\operatorname{Re}(z), \operatorname{Im}(z)$ はそれぞれ z の実部, 虚部を表すものとする.
- (2) $z_n = 1$ である確率を P_n , $z_n = i$ である確率を Q_n とする. P_n, Q_n についての漸化式を立てよ.
- (3) $z_n = 1, z_n = i, z_n = -1, z_n = -i$ である確率をそれぞれ求めよ.
- (4) z_n の期待値が $(i/3)^n$ であることを示せ.
- (5) $z_n = w_n$ である確率を求めよ.
- (6) $z_n + w_n$ の期待値を求めよ.
- (7) $z_n w_n$ の期待値を求めよ.

第3問 解答例

(1) 赤いカードが2回連続で出されたら

$$z_{k+2} = -z_k^2$$

となり, これは白いカードが2回連続で出された場合も同様である. 赤いカードが取り出され, 白いカードが取り出された場合

$$z_{k+2} = z_k^2$$

となり, これは白いカードが取り出され, 赤いカードが取り出された場合も同様である. ゆえに,

$$z_{k+2} = \begin{cases} -z_k^2 & \text{同じカードが2回連続で取り出された場合} \\ z_k^2 & \text{異なるカードが取り出された場合} \end{cases}$$

ここで, $n=0$ のとき $z_0=1$ であるので, z_2 は1または -1 の値をとる. 帰納的に $n=2k$ のとき z_n は1または -1 の値をとるので, $\operatorname{Im}(z_n)=0$ となる. 一方で, $n=1$ のとき, z_1 は i または $-i$ である. 帰納的に $n=2k+1$ のとき z_n は i または $-i$ の値をとるので, $\operatorname{Re}(z_n)=0$ となる. よって, 題意は示された.